かるちゃ～ナビ

ザ・見遊（みゅ～）じあむ

川端康成文学館（茨木市）

16

「トンネルを抜けるとそこは雪国だった」で始まる『雪国』、何回も映画になった『伊豆の踊り子』、そして『古都』『千羽鶴』などの作品で有名な川端康成。1899年（明治32）6月14日に大阪市北区の天満で生まれた川端康成ですが、3歳で両親と死別し、以降の18歳までを、茨木の地で祖父母や親戚のもとで、また、学校の寄宿舎で暮らしたのです。

茨木中学を卒業後、東京にでて、第一高等学校、東京帝国大学文学科を卒業。本格的に文学の道に入り、菊池寛、横光利一、今東光、三島由紀夫らと交わり、多くの作品を発表しました。

ノーベル賞作家が幼・少年期を生きた茨木

ゆかりの地に茨木市立の川端康成文学館が開館したのは、1985年（昭和60）。館の前の道路は「川端通り」の名が付けられています。館内には、初版本、遺品、書簡、原稿、直筆の掛け軸が展示されています。またビデオや写真などで川端康成の「生い立ちと文学」をわかりやすく紹介しています。とくに、茨木中学時代の作文は文学を志す思いをほうふつとさせてくれます。また、祖父母と生活した家屋敷の模型も展示されています。

川端康成の多くの作品は世界的にも大きく評価され、1968年（昭和43）には日本人初のノーベル文学賞を受賞しています。

「川端通り」に面して建つ文学館

ミュージアムメモ

▶所在地／〒567-0881茨木市上中条2-11-25▶開館時間／午前9時～午後5時（月曜日は12時まで）▶休館日／毎週火曜日・年末年始▶入館料／茨木市民は無料。一般200円▶交通／阪急京都線茨木市駅またはＪＲ京都線茨木駅下車徒歩20分、駐車場あり▶問い合せ／0726-25-5978

このシネマがえいが

武士の一分（いちぶん）

人には「譲れないもの」がある

山田洋次監督が、「たそがれ清兵衛」「鬼の爪　隠し剣」についで、藤沢周平もの時代劇3部作の最後として製作。昨年12月に全国公開されて1カ月たちましたが、正月をはさんでなお、客足が好調のようで、話題の作品です。

作品の舞台はこれまでと同じ「海坂（うなさか）藩」（山形・庄内藩がモデル）。藩主の毒見役をつとめる三村新之丞。ある日の毒見で目を患い失明。役務が果たせず、石高も減らされ奈落に沈む新之丞。「力になろう」と新之丞の妻・加世に言い寄る上役。夫婦の危機、そして妻を罠にはめた上役との果し合いへ。いつもの山田洋次時代劇のとおり、下級武士の暮らし向きが丁寧に描かれながらクライマックスにいきます。

ＳＭＡＰの木村拓哉主演ということで、役者としての力量が問われていますが、緊張感のなかにもコミカルな立ち居振る舞いで、それなりの味を出しているようです。桃井かおり、坂東三津五郎、緒形拳、小林稔侍などの脇役がいい感じです。とくに、山田洋次作品には欠かせない笹野高史が、主人公の下僕役で光っています。主人公が離縁した妻を飯炊き女として連れもどし、盲目の主人公に食膳を出すシーンが胸を打ちます。「一分」とは、面目、本分、譲れないもの、などの意味を持っています。

「いい映画を見た」とうれしくなる一作です。まだの方はぜひどうぞ。

大阪の戦跡を歩く　第15歩

陸軍第４師団司令部跡（大阪市中央区）

大阪市民の寄付で建築

2001年まで大阪市立博物館でした

大阪城天守閣の近くに、ヨーロッパ中世の城郭建築のような堂々とした建物があります。大阪城天守閣といっしょに、大阪市民の寄付によって建てられたもので、1931年（昭和６）に完成し、当時、大阪城内に分散していた師団の庁舎がここに集められました。

1940年（昭和15）には中部軍司令部となりました。戦後は、大阪市警察、大阪府警察の建物となり、さらに、1960年（昭和35）からは大阪市立博物館となって市民に親しまれましたが、2001年（平成13）３月に閉館しました。建物前の道路には終戦の直前に防空壕が急きょ掘られた歴史もあります。

摂津・河内・和泉　おおさか三国誌

日本一のコリアタウン・猪飼野（いかいの）を歩く

16（大阪市生野区）

「イノシシ」の年にちなんで、猪の名のつく町を歩いてみました。大阪市生野区は人口13万人、その4分の1にあたる約3万5000人が、在日韓国・朝鮮人です。そしてまた、区内でもっとも在日韓国・朝鮮人が多く密集しているのが、「猪飼野」と呼ばれた地域です。その名は古く、「日本書紀」の仁徳天皇の条に「猪甘津」と記されているのが起こりと言われています。その「猪飼野」の地名も1973年2月の住居表示実施によって消えました。いまは、大阪市バスの停留所に「猪飼野橋」などの名が残っているだけとなりました。

極彩色の「百済門」がコリアンタウンの入口です

猪飼野に隣接して御幸森商店街があり、その一帯は「コリアタウン」と呼ばれて、朝鮮半島の文化、食材、があふれ、今の韓流ブームにも乗って、ちょっとした観光地です。商店街の区切りには「百済門」と大きく書かれた極彩色の門がありました。チョゴリの人、ハングル文字、焼肉とキムチのにおい、賑やかな店頭、1軒ずつ見て歩いているだけでもちょとワクワクしてきます。商店街の中ほどに「異文化交流の家」の看板のあるスペースもあります。

この地域では、昨年の10月には近くに大衆演劇の芝居小屋「明生館」もオープンして、新しい地域文化の発信地になっています。

いまも心に響く名詩・名歌・名語録

赤貧洗うがごとき心持て
無一文こそ　富というなれ
田中　正造

「赤貧洗うがごとき」は、貧乏があまりにひどく、洗い流したように所有物がひとつもないこと。田中正造は1841年（天保12）11月３日に栃木県佐野市小中町で、名主の長男として生まれました。不正とたたかい、自由民権運動家として活動。また政治家として第１回総選挙で衆議院議員に当選。足尾銅山の鉱毒問題を繰り返し国会でとりあげ、1901年12月、天皇に直訴しました。その生涯を描いた映画「赤貧洗うがごとき」が上映中です。

何となく　今年はよい事あるごとし
元日の朝晴れて風なし
石川　啄木

1911年（明治44）、啄木26歳の正月の歌。表記のほか、啄木がこの年の正月を歌った歌はたくさんあります。前年の12月に『一握の砂』が刊行され、記者としての給料も12月は165円65銭。賞与は54円。ほとんどは借金返済に消えましたが、啄木にとって、生活に明るい材料を見出した正月でもありました。「正月の四日になりてあの人の　年に一度のハガキも来にけり」の歌もあります。